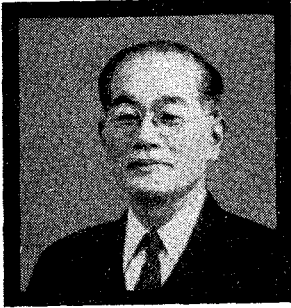


## 故 前 書 記 長 中 川 一 美 君 略 歴



正員 中川一美君は明治 30 年 10 月兵庫県に生まれ、大正 13 年鉄道省教習所高等部土木科を卒業し、鉄道省工務局に奉職、昭和 13 年門司鉄道局、同 17 年熊本工事々務所へ勤務し、同 20 年鉄道省熊本工事部長の栄職につかれ、同 24 年 1 月退官されるまで終始鉄道人としての道を歩まれた。その間、昭和 16 年に著書「停車場」を出版された。

学会にあつては大正 15 年 7 月より昭和 13 年 6 月まで満 12 年間の長きにわたり土木学会誌編集嘱託として会誌の編集に努力し、昭和 24 年 3 月迎えられて書記長となり、変動する経済情勢下によく書記長としての重責をはたされ、学会発展の基盤を確立されたが、昨年 8 月頃より健康を害され病床に親しまれていたが、昭和 33 年 8 月 30 日、ついに永眠せられた。

本学会は君の葬儀にあたり靈前に香華を供え弔詞を捧げたが、ここに重ねて哀悼の意を表する。

### 弔 詞

本学会書記長 中川一美君 の柩の前に土木学会を代表して謹んで弔詞を捧げます。

昨年 8 月病を得たりと聞くも療養のかたわら常に会務を掌り、事務の滞りなき進捗を見ておつたので、あえて重患たるを察し得なかつたが、突如急変、逝去の事態に至れるは、君が会務の重責を果さんために、いかに苦痛をしのんで病と闘っていたかと思うと心が痛む。

君は大正 15 年 7 月より十有二年、土木学会誌編集嘱託として、また昭和 24 年 3 月より今日まで書記長として、君が人生の半ばを本学会の事業に奉仕せりと見るべきである。

性格温和にして長老を敬うこと厚く、部下に思いやり深く、また致密にして事務的の処理正確、とくに図書編集に関する技能に卓越し、学会刊行物のことごとくに自ら手を下して、寧日なく心魂を傾むけるを、むしろ趣味とせるは顧みて今日の事態を生ずる一因となつたのではないかと残念に思われる。

さらに現在の土木学会会館建設については故大西前会長よりの基金をもととして利殖に尽力し、とにかく学会独力建設を見るに至つたことは、君が蔭の大なる効績と言わなくてはならない。これに加うるに現土地に土木会館本建築の計画を策しておつたおりとて、さぞや心残りのことであつたらう。

われら理事者はその遺志を体し、君が夢の実現の一日も早からんことに努力する。以て君よ、霊を安んぜられよ。ここに謹んで弔意を表します。

昭和 33 年 9 月 2 日

社団法人 土木学会々長 工学博士 米 田 正 文

### 故中川一美君の死を悼みて

田 中 茂 美

すぐる 10 年間わが土木学会の名書記長として親しまれてきた中川一美君が、癌という難病に犯されて、ついに他界された。私は永い国鉄の生活の中に、あるいは直接に、あるいは間接に同君と仕事をともにしてきたし、また同君が昭和 24 年国鉄を退職されるさい土木学会に書記長として推せんした関係もあつて、同君の死にこの上ない悲しみを感じるものである。

書記長 10 年といえは随分永い勤めであり、戦後の混乱時代の学会の窮状から今日の隆盛に至るまで、随分と苦労が多かつたはずであるが、同君はその誠実円満な人格と持ち前のねばりをもつて書記長としての職責を完全に果された。そして現職のまま亡くなられたのであるから、その点さぞかし本望であつたらうが、学会にとつて

は、この打つてつけの名書記長を亡くしたことは、大きな損失といわねばなるまい。

私はいま中川君との親交のあとを追憶して数々の思い出があるが、忘れられないのは戦争も末期の頃、連日の熾烈な空襲と戦いながら九州の鉄道を護つていたときのことである。資材劣力すべてが不如意な中に、沈着確実に事務を処理していつた同君の働らきに、彼の真面目があつたように思う。また昭和 24 年学会の本部を大手町の高架下に新築するさい、当時の困難な社会情勢下にあつて、資金を集めるのに多大の苦労をともにした思い出も忘れることができない。

同君は齡未だ 60 才、健康には恵まれていた。癌とやらごう病にさえ取りつかれていなかつたならば、天寿を全うできたであろうに、かえすがえすも残念でならない。願わくば同君の霊が天にあつて安らかに、そして君の最も愛した学会の発展を見守つてくれることを……。

(興和コンクリートKK社長 元土木学会副会長 工学博士)